

第4章 点検評価室

1. はじめに

大学評価のあり方については公平性、透明性、多面性、合目的性をどのように実現させるか、そして、その結果が将来の学問や社会のあり方にどのような影響を及ぼすのかなど、多くの議論がある。その中で、国立大学は2004年度からの法人化を控え、大学評価対策の具体化を進めている。東北大学でも2003年2月に東北大学研究者情報データベースが稼働を開始し、同年11月にはこれを包括する大規模な東北大学情報データベースの構築計画が発表された。また、2002年10月には研究評価にも利用される引用文献データベース Web of Science（自然科学系は1945年からの全データ）も、東北大学図書館に導入されている。

一方、本所では2001年4月以降に採用される教官には任期制が敷かれ、2002年4月からは在籍する全教官それぞれが年1回、所長に業績報告する事が義務付けられた。また、翌2003年4月には本所教職員発表の論文情報データベース（KINLIB）の情報収集中止が発表された。

このように大学評価に関する周辺状況は本所の内外共に急激に変動している。そのため、点検評価室では通常業務においては臨機応変の対応をしつつ、新たな事態に備えた情報収集や調査活動を行っている。

2. 組織構成

点検評価室は2000年6月、自己点検評価、外部評価などに必要な情報収集・整理（データベース化）・提供（冊子、Webなど）や評価関連の調査研究を担当する目的で設置された。

本室の人員構成は自己点検評価委員会委員長である室長（初代は花田室長）1名と情報・広報室から異動した専任助手1名（小野瀬）の2名である。本室設置により、意思決定組織（自己点検評価委員会）と実務担当組織（点検評価室）の関係が密接になり、評価関連業務の責任の所在や指示命令系統の明確化、実務面での効率化が図られた。その後、2001年9月の委員会制度の変更に伴い点検評価委員会の役割は研究企画調整委員会に含まれることになり、2002年3月から2003年3月まで櫻井研究企画調整委員会委員長、2003年4月から2004年3月まで前川委員長がそれぞれ室長を務めた。

3. 2002年度の主な活動

3.1 個人業績評価への支援

市販データベースソフト（File Maker Pro）のライセンスパックを購入して全部門に配布すると同時に、60項目の業績評価項目への回答用テンプレートを作成して配布した。更に、記述方法などの電話相談窓口を務めた。

3.2 本所特注 ISI-ICR for IMR(1980-2001年版、CD版)の検討と配布

内容と機能について調べ、2002年度には全部門にこのCDの複製を作成して全部門に配布した。機能的には便利であり、概略的な情報を得るためには役立つものである。しかし、2003年度には東北大学に Web of Science が導入され、そこから目的に応じたより精度の高い情報が得られること、CD中の個人のランキングにいくつかの問題があり、部門側からクレームがついたことなどからCDの購入と配布は中止された。

3.3 点検評価室ホームページの更新と維持管理

2000年11月実施の外部評価の報告書などを掲載しており、必要に応じ、時々、更新した。

3.4 本所一般公開（2002年11月）への取り組み

科学者を中心とした偉人の伝記をデータベース化し、そこから子供の頃の成績を調べ、『天才たちの通信簿』と題する展示を行った。

4. 2003年度の主な活動

4.1 東北大学研究者情報データベース（2003年2月稼働開始）構築支援

東北大学研究者情報データベースは構築途上であり、稼働開始後も引き続き項目内容の改良や機能追加が行われた。そのため、データブック的な自己評価報告書や論文リストを発行している部局の部局管理者（本所では点検評価室助手）数人が打ち合わせメンバーとして何度か招集された。その間、点検評価室では当該データベースの項目と本所で従来から実施している自己評価および個人業績評価の項目との摺り合わせを行い、打ち合わせでの意見として、あるいは部局側からの要望書として全学側へ伝えた。これによって東北大学研究者情報データベース（後に情報データベース）には本所の評価項目や経験もかなり反映されている。

4.2 Web of Science からの一括情報収集と東北大学研究者情報データベースへの一括登録

東北大学研究者情報データベースでは、稼働後間もなく「著書・論文」の項目に、複数の個人の複数のデータを部局管理者が一括登録できる機能が追加された。また、このデータベースは科学技術振興機構のReaD調査の電子化対応が構築目的の一つになっている。

そこで、2003年11月のReaD調査に際し、点検評価室では本所発表文献書誌情報をWeb of Scienceから検索し、本人によるデータ確認後、1,380件を、それ以外のデータ186件も併せると計1,566件を、東北大学研究者情報データベースの各個人の領域に一括登録した。その過程で本所発表文献の80%以上がWeb of Scienceに収録されていることがわかった。Web of Science収録データの一括登録方式には次のメリットがある。

- ・ 入力者側および情報収集担当者側の負担削減。
- ・ 入力ミス、表現形式の不ぞろいなどへのチェックや修正がほとんど不要。
- ・ 情報の客観性がある（別刷り収集などが不要）。
- ・ 東北大学研究者情報データベースの入力率の向上。

4.3 点検評価室データベース（File Maker Pro）の運用

本所の自己点検評価報告書作成では1993-1994年版（2回目）作成の1995年以来、データベースソフトFile Maker Proを利用し、データ収集（電子メールの添付ファイル）や、編集（データ処理）、版下作成を行って来た。一時、File Maker Proに頼らないWebからの入力方式を試みたこともあるが、入力ミスや重複登録の修正がサーバー側からしかできず、本報告書のように多岐にわたる不特定多数のデータを収集する場合には向いていないことが解った。そこで、点検評価室では2000-2001年版（5回目）作成に際し、File Maker ProのWeb表示機能を利用した入力方式を開発した。2003年度にはこの方式を前述の4.2におけるWeb of Science対象の文献以外の情報収集に利用した。これには次のメリットがある。

- Web上で各自の回答欄にパスワードによりアクセスし、随時入力できる。
- 自分の登録データ全体を随時に加除修正できる。
- 選択肢の設定により入力の省力化や用語の統一が図れる。
- ファイルの設計や変更が短時間で済み、柔軟な対応が出来る（計算機言語不使用）。
- データ収集からデータ処理（編集）、版下作成まで一種類のソフトの同一ファイルで出来る。
- データベースソフトのバージョンアップはサーバー側だけで済む。

2003年2月から東北大学研究者情報データベースが稼働し、一方では、商業的文献データベースの急速な発達がある。一般に、他のデータベースの検索結果を利用するには、利用者側が何らかのデータベースソフトに取り込んだ方が自由なデータ処理や加工ができ、用途が格段に広がる。東北大学研究者情報データベースは部局側の利用目的に配慮して構築されたものであり、将来的には部局側の加工は不要になるかもしれないが、現状ではそこまでは至っていない。よって部局側では、目的によっては何らかのデータベースソフトを使って相互に補いながら、外部のデータベースをうまく活用し、柔軟に対応することが必要であろう。その意味でもFile Maker Proのような安価で小回りの効く市販データベースソフトの利用価値は高いと考えられる。

4.4 国際会議Peer Reviewの手続き支援

各部門担当者から国際会議Peer Reviewの申請を受け付け、ReviewerからReview Paperを受領するまでの連絡業務を担当している。2003年度は6部門8講演分を扱った。

4.5 金研職員論文情報データベース（KINLIB）の検討

検索結果をダウンロードするなど商業的データベースのような機能はついていないが、本所として貴重なデータを収録している。Web画面に表示されたテキストデータを複数の市販ソフトを利用して加工し、File Maker Proに取り込み、全学的データベースへの一括登録、その他の応用の可能性を探っている。

5. 文献調査および研修

5.1 Web上での情報検索、電子出版など情報発信に関する文献調査

図書館学および情報管理関連の専門雑誌を中心に文献調査を行った。これによると、“情報＝IT＝計算機技術”というよりは、精度やその価値に信頼の置ける“情報内容”を効率的に得る方法（検索技術）や情報収集能力などが今日的課題になっており、そのためにどのような方法をとるかを論じているものが目についた。

5.2 最新の商業的データベースや各種市販ソフトの利用に関する講習会などへの参加

Web of Science 関係の講演会や講習会には目に付く限り、欠かさず参加している。また、データベース作成関連の会社やソフトの販売会社などが開催する展示会や講演会では実際の最新情報が得られるので、出来るだけ参加している。

5.3 その他

2002—2003年度は点検評価室を取り巻く状況がめまぐるしく変化し、対応に追われた傾向がある。技術的調査活動の先にあるものをもう少し検討したいと考えている。